

疾病や栄養を含む広い環境の見地から 小児の心身障害を生むおそれのある諸因子について、各専門家の研究が行われている。

## 1. 先天異常の成因及び乳幼児の発育過程における

### 疾病傷害などの追跡研究

須川 豊

先天異常の成因を明らかにするためには、retrospective studyよりもprospective studyがはるかに有用なことは言うまでもない。しかしprospective studyは困難が多いので、その報告はほとんどない実状である。そのなかで、約1万5千名の多数について、妊娠中から学令に至るまで継続して健康状態を追跡調査したこの研究は、極めて貴重なものである。

疫学調査における先天異常の基準を定めることの必要性和困難性を種々論じているが、同感である。しかし、その困難をのりこえ、さらには出生時のみではなく、その後の検診で先天異常がどのように追加発見されるか、また、その程度を治療不要、治療可能及び治療不可能に分けるなどのことにも、留意してはどうか。

## 2. 先天股脱予防に関する研究

内藤 寿七郎・沢田 啓司

先天股脱予防の実践活動により発現率が著減した実績は、先天的な素因よりもむしろ出生後の発症をうながす因子が大きな役割を演じていることを示した意味からも貴重である。

予防のためには、「下肢の動きをさまたげないような股おむつ、おむつカバー、衣服」という明確な結論を、一般に周知徹底させたい。

新生児、3～4か月及びその後の検診においてはもちろん、一般の乳児診察に当たっても必ず先天股脱の有無に注目すべきことを徹底させる必要を改めて感ずる。

## 3. 小児のけいれんに関する研究

### (1) 治療に関する研究

福山 幸夫

抗てんかん剤の血中濃度測定法が進歩した結果、投与量不足による無効例が少なくないことや、剤

型により血中濃度に差があることが明らかにされた。これらは適正投与量を定めるのに役立つわけで、服薬中止は脳波正常化2年後を可とすることを明らかにしたことと並んで、治療上の大きな進歩をもたらすものである。

さらに、West 症候群、Lennox 症候群などの難治性てんかんに対するACTHやV・B<sub>6</sub>の治療成績も、今後の研究継続の必要性を思わせた。

### 3. 小児のけいれんに関する研究

#### (2) 成因および予後に関する研究

大田原 俊 輔

てんかん罹病率8.2%という数字は、岡山県下の全患児をよく把握して得られたものだけに貴重である。

推定原因中で予防接種が33例1.5%であったというが、三混ワクチン接種後と二混ワクチン接種後のけいれん初発日の分布状況の比較などによって、百日咳ワクチン接種とてんかんの因果関係を一層明らかにできないものだろうか。

5歳児までの熱性けいれんの罹病率は21.4%と高いことを明らかにしているが、それだけにこれらの小児の予後や発育などの追跡調査に期待したい。

### 4. 小児の微症状を指標とした心身障害の

#### 早期発見方法に関する研究

巷 野 悟 郎

心身障害児の諸機能障害の一表現として体温不安定を明らかにするために、先づ健康児の体温測定について基本的検討を行っている。

日本各地の健康児についての1日の体温変動では、37°C以上は極めて少なかったという。このような成績はそれ自身貴重ではあるが、主題から考えれば、先づ心身障害児について検討し、一見異常と考えられる成績を得た場合に、健康児ではそれとは異なるかどうかと比較していく方法も、結論を得やすいと思われるので、とってよいのではなからうか。

## 5. 小児の精神身体発育からみた心身障害の早期発見

### 方法に関する研究 (1)精神身体発育

沢田 啓 司

愛育病院保健指導部受診児の定期健診記録は、発育の縦断的研究に役立つ貴重なものである。これを生かして、発育におよぼす諸要因の影響が明らかにされた。さらに例えば、なんらかの要因による一過性の発育不良の回復状況なども知りたいものである。

## 5. 小児の精神身体発育からみた心身障害の早期発見

### 方法に関する研究 (2)神経学的発育

前川 喜 平

脳障害の早期発見のための最も有用な検査項目として、**traction response**を定めるまでの検討が慎重に行われている。

標準化のための検討対象の乳児が果して脳障害を全く有していない健常児であったか。それを確定するために例えば、それらの乳児の歩行開始年令と**traction response**との関連をみるなどのことも有用ではなからうか。

## 6. 心身障害の原因としての小児の事故に関する研究

木 村 三生夫

神奈川県下の事故の分析が詳細に行われ実態が明らかにせられたのは、たいへん参考になった。疾病による死亡が減少した反面で、小児の事故が幼児以上の死因の第1位を占めるに至った事実を一般に周知させ、その予防が大切であることを強調したい。そのためには、発生要因の分析に当って本人の、保育者の注意及び、社会公共施設の整備などの何れに欠陥があったかを検討してはどうか。

## 7. 健全育成の立場からみた幼児の肥満（傾向）の 実態とその対策に関する研究

高 石 昌 弘

全国各地域幼児の身体計測が行われ、肥満の実態が明らかにされた。皮下脂肪厚はカウプ指数との相関が高いというが、その計測誤差は考えに入れてもよい程度だろうか。

幼児肥満と乳児期体格、食事摂取状況、身体運動、生活時間、父母の年齢と体格などと相関は検討の価値があり、それに基づいて幼児肥満予防のための生活指導基準を考えるのは極めて有意義である。しかし、どの程度までの幼児肥満が果して予防治療を要するものだろうか。それを知るために例えば、学童期の発育健康状態との関連なども検討してはどうだろうか。

## 8. 離乳食，幼児食に関する研究

今村 栄一

乳幼児期には食物を自ら選ぶのではなく、与えられたものしか摂取できない。この意味で離乳食や幼児食として適当な基準が強く求められるのは当然である。このための基準資料として各地での現状調査を広く行ったのは、たいへん適切である。

基準作成に当っては、現実即しており、したがって実行容易であることが大切であるから、成人食中で離乳食、幼児食としても適当なものを示すことにも留意してはどうか。

## 9. 乳幼児の歯科保健管理に関する研究

榊原 悠紀田郎

乳幼児の歯科保健管理を早期に行うほど、う歯が少ない成績が示された。果して「管理が遅い」又は「管理をはずれる」こと自身のみ影響なのか、他の要因、例えば、食事傾向、一般発育などの影響の有無についても、さらに知りたいものである。

## 10. PCB汚染地区の母親とその児に関する研究

高久 功

PCB中毒によるいわゆる油症患者が多発している地区で母子がなんらかの影響を受けていないかを調査したことは、極めて有意義である。

その結果では、油症児も精神的身体的に有意な異常が見出されなかったことは悦ばしい。今後とも、発育健康状態の追跡観察を望むが、かりに異常が認められたとしても、その間に他の要因が関与する可能性があるから、PCB中毒との因果関係を考えるには、十分に慎重であらねばならないと考えられる。

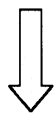
## 11. PCB 取扱い婦人とその子供の健康に関する研究

原 一 郎

血液中や母乳中のPCB濃度の高い母体から生れた子供の健康状態を追跡調査していることは、母乳の安全性検討の基礎資料として貴重である。

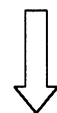
子ども検診の結果では、爪、皮膚、歯などに異常を認める率が高いが、全身的影響をよく反映すると思われる心身の発育状況はどうだったのだろうか。

動物実験で高濃度PCB中毒の場合には、低濃度の場合と異って脂肪中のPCBパターンが油症に似ていた成績は、油症中毒の診断に役立つ意義が大きい。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



先天異常の成因を明らかにするためには,retrospective study よりも prospective study がはるかに有用なことは言うまでもない。しかし prospective study は困難が多いので,その報告はほとんどない実状である。そのなかで,約1万5千名の多数について,妊娠中から学令に至るまで継続して健康状態を追跡調査したこの研究は,極めて貴重なものである。

疫学調査における先天異常の基準を定めることの必要性和困難性を種々論じているが,同感である。しかし,その困難をのりこえ,さらには出生時のみではなく,その後の検診で先天異常がどのように追加発見されるか,また,その程度を治療不要,治療可能及び治療不可能に分けるなどのことにも,留意してはどうか。